

第六十三回全国俳句大会 当日句成績

日時 令和六年九月十日
会場 有楽町朝日ホール

藺草 慶子選

特選

コスモスの真只中の不安かな

弾塚 直子

秋風鈴母の記憶の途切れ途切れ

中村 由美

大病を患ひ四年零余子引く

森 加名恵

入選

贅沢に風鈴鳴らし老いにけり

桂田 哲夫

朝顔や洗濯が好き干すのも好き

前田 沙羅

縁側に父母の座空けて月祀る

金谷 洋次

書肆を出て書肆へ神田の十三夜

船津 聖子

人去りて芝なほ明し秋入日

野間千鶴子

芒野の風は光となりゆける

笠原 秀

掌の種も剥がして大根蒔く

志磨 泉

秋の燈や再び出逢ふリルケの詩

岸田 聡子

桐一葉母を労る父百歳

山中 洋子

秋の雲艇庫の鍵は釘一本

関 妙子

水栓を捻るごと止む秋の蟬

緑川美世子

字の付く地名を誇り里祭

石崎 宏子

久に着るスーツの強しきりぎりす

鎌田 俊

案内に山羊ついてくる葡萄園

清水 和代

甌穴の底を見せたり水の秋

花土 公子

大竹 多可志選

特選

銀座まで出る日の服を選ぶ九月

伊藤宇太子

妹が先に嫁ぎぬ稲の花

中川いく子

あの街で語りし夢よ柚子は黄に

佐久間京子

入選

敵味方なき青空へ柿を干す
文字丸き蕪村の墓や秋暑し
靖国へ卒寿の歩み終戦日
天高し鍬かつぎゆく坂の道
東京は青春のまち秋涼し
次の風待つかに肩に赤とんぼ
串かつに三河味噌塗り豊の秋
三つ編の少女の髪や小鳥来る
声たてて笑ふ赤子や豊の秋
字の付く地名を誇り里祭
うぐひすの声に米寿を迎へけり
フォーマルをラフに着こなしつくつくし
大病を患ひ四年零余子引く
マリオンへ集まつて来る秋日傘

関戸 信治
野村 桂子
横田 澄江
村松 鈴恵
山田 千絵
服部 敏子
丹羽 寒國
内田 啓子
佐久間尚子
石崎 宏子
西岡三四郎
菊田 一平
森 加名恵
佐藤 弘

小川 晴子選

特選

縁側に父母の座空けて月祀る
小鳥くる朝なあさなの卵焼
父からの敬語の手紙山椒の実
入選

金谷 洋次
猪瀬 達朗
竹田 絹子

古代蓮遺跡の丘の空広く
薄墨に佛の文字やひやおろし
古隅田古利根に入り秋燕
生きてゆく限りハンカチ握り締む
かなかなや廃銀山の大鳥居
空缶を蹴ればあつけらかんと秋
香水の一滴こころ立て直す
推敲のペン置き月に語りかけ
ペコちゃんは今日もご機嫌天高し
秋の雲艇庫の鍵は釘一本
塩むすびを小さく三つ震災忌

安部川 翔
下平紀代子
中村まもる
萩原 陽里
川上えりさ
齊藤 満月
小川田鶴子
坂本ひさ子
くにしちあき
関 妙子
馬場眞知子

敵味方なき青空へ柿を干す
菊月や影なき良き日有楽町
父逝きて厚き碁盤や薄紅葉
胡弓の音なるの地へ飛べ風の盆

関戸 信治

片倉 音訪

山口 沈流

松村 直央

鈴木 太郎選

特選

胡弓の音なるの地へ飛べ風の盆
驢馬の背の荷は高々と秋日濃し
良夜かな猫もインコも褒めて飼ふ

松村 直央

茨木 紀子

日高まりも

入選

湖の霧すべり魁夷の碧となる
菊の酒一椀で足る齡かな
山鳩の声は母とや秋遍路
靖国へ卒寿の歩み終戦日

後藤知朝子

今村 千年

香川 純二

横田 澄江

中島真由美

三上 程子

大西 朋

山本 紀人

藤波 悦子

前畑 桂子

川上えりさ

馬場真知子

藤本 はな

石田 静

山崎史保子

蒼穹も雲の形も秋暑し
大銀河兄の記憶の外に吾
伏せて干す酒器の不揃ひ夜半の秋

高田 正子選

特選

草露のひかりの階を上りけり
掌の種も剥がして大根蒔く
水栓を捻るごとと止む秋の蟬

西山 睦

志磨 泉

緑川美世子

入選

敵味方なき青空へ柿を干す
林火忌の胸に残りし手術痕
朝顔や洗濯が好き干すのも好き
アスファルト灼けて重心定まらぬ
おはよりの声にはにかむ休暇明
マリオンへ集まつて来る秋日傘
空缶を蹴ればあつけらかんと秋
流燈の流れに乗ればふり向かず
香水の一滴こころ立て直す
大西瓜包む風呂敷広げたり
東京の星の出揃ふ夜学かな
開く「斜陽」にピースの薰り秋灯
遠山の向かうは知らず蕎麦の花
青でなく藍でもなくて蛍草
案内に山羊ついてくる葡萄園

関戸 信治

前田 拓

前田 沙羅

大野まりな

木村麻利子

佐藤 弘

齊藤 満月

菊田 和音

小川田鶴子

廣岡あかね

矢野みはる

広海めぐり

鈴木 基之

磯貝由佳子

清水 和代

山田 真砂年選

特選

敵味方なき青空へ柿を干す
花野ゆくほどにこの世の遠くなる
賞味期限の切れて無事なり震災忌
入選

関戸 信治

牛田 修嗣

小西 弘子

贅沢に風鈴鳴らし老いにけり

手に負へぬものに台風そして恋

朝顔や洗濯が好き干すのも好き

アスファルト灼けて重心定まらぬ

砂糖黍牛がひねもす白廻す

寝相みな泳ぎ疲れてをりにけり

乗り継ぎて乗り継ぎてこの残暑かな

掌の種も剥がして大根蒔く

夜半の秋をさなのことばみんな詩

桂田 哲夫

花澤ちいこ

前田 沙羅

大野まりな

石川 聖子

野中 亮介

荒田眞智子

志磨 泉

大沢美智子

桐一葉ころりころりと物忘れ

長坂 博子

かなかなや村の灯一つ一つ点く

森岡 正作

皆降りて通園バスに蟬の殻

樋口 冬青

列島の縮図のごとし唐辛子

田部 恭子

遠山の向かうは知らず蕎麦の花

鈴木 基之

案内に山羊ついてくる葡萄園

清水 和代